

3	学校名 住田町立世田米小学校 外4校	R4~R6
---	--------------------	-------

## 令和6年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

子どもたちに新しい時代を切り拓くために必要な資質・能力や心の豊かさを育成するため、小・中・高等学校の滑らかな教育の接続を活かして、新たに教科「地域創造学」を新設した場合の教育課程、指導方法及び評価方法等の在り方に関する研究開発

### 2 研究開発の概要

#### (1) 研究のねらい

岩手県の中山間地域に位置し、豊かな自然に恵まれた住田町では、教育振興基本計画基本目標「生涯学び続け、新しい社会を創造する心豊かな人づくり」の基に、自立して生き抜く力や協働する力、豊かな人生や地域づくりを主体的に創造する力を身につけた人材育成を目指し、これまでもその風土を生かした教育を推進してきた地域である。しかしながら、時代の潮流の中、中山間地域における地域課題に直面している現実もまた事実である。本町が、将来にわたって持続可能な町の姿を描く上でも、ふさわしい資質・能力を獲得しながら自己の人生や社会を創造できる人材育成を目指すことは、今後ますます不可欠であり、時代が今後どのように変化を遂げて不変な考え方である。したがって、本町で学ぶ子どもたちに、町内の小・中学校及び県立高校が一体となって具体的に育むべき資質・能力を明らかにしながら、着実に育成することができるよう、全町を挙げた教育の展開を試みる研究開発に取り組む。

#### (2) 研究の方針

前述の研究のねらいを踏まえ、本研究開発においては、小・中学校及び高等学校が育成を目指す資質・能力を共有し、一体的に推進する教育を展開する。具体的には、12年間を通して、「子どもたちが変化の激しい社会において、充実した人生を実現していくために、豊かな心を持ち、自ら主体的に未来の社会を創造していくことのできる力（社会的実践力）の育成」を目指す。そのために、住田町内の教育の特色を生かした教科「地域創造学」を新設し、これを中核に位置付けた12年間の教育課程の編成と、その指導方法及び評価方法等の開発を行っていく。

### 3 研究の目的と仮説

#### (1) 研究仮説

新設教科「地域創造学」において、小学校から高等学校まで、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力の育成を共通に目指し、以下の手立てを講ずることにより、新しい時代を切り拓く心豊かな人材を育成することができるであろう。

そのために具体的な手立てとして、以下の5点に取り組む。

- ① 新しい時代を切り拓くために必要とされる資質・能力（社会的実践力）の規定
- ② 社会的実践力を育成するための教育課程の編成や効果的な指導方法の開発
- ③ 社会的実践力の育成を評価するための具体的指標の開発
- ④ 教育課程の特例による教科「地域創造学」の創設と授業実践
- ⑤ 新設「地域創造学」に関するアンケート調査や外部評価の効果的な活用と教育課程等の在り方の検証

さらに研究開発学校延長指定3年間に関しては、上記に加えて、以下の3点について重点的に取組を進め、提言を行う。

- ① これまでに開発してきたカリキュラム全体の不断の見直しサイクルの構築
- ② 「探究の六つのプロセス」と社会的実践力とのつながりを意識した学習評価の工夫
- ③ 社会的実践力を育成するための「地域創造学」教科書の開発・実施・改善

## (2) 教育課程の特例

- ① 小学校では、生活科、特別の教科道徳、外国語活動、外国語及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1学年106時間、2学年110時間、3、4、5、6学年では85時間設定した。
- ② 中学校では、1、2学年においては国語を減じて、また、全学年において、特別の教科道徳、社会及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1年生では59時間、2、3学年では79時間設定した。
- ③ 高等学校では、全学年において総合的な探究の時間を減じて、「地域創造学」を1単位35時間設定した。

## 4 研究内容

### (1) 教育課程の内容

- ① 新設教科「地域創造学」の実施
  - ア 12年間の教育課程と指導方法、評価方法等の開発を行う。
  - イ 社会的実践力の資質・能力系統表、年間指導計画、学習指導要領解説に基づく授業実践。
  - ウ 授業実践及び教育達成調査の結果、「地域創造学協力者会議」での意見等に基づく年間指導計画や指導方法等の修正。
  - エ 児童生徒の探究的な学習活動の充実に向けた六つの探究のプロセスに基づく多様な授業展開の在り方の追究。
  - オ 教科領域との単元関連表を基にした教科における授業実践・交流。
- ② 地域創造学を据えた教育課程の編成について

各教科等と地域創造学に共通している育てるべき資質・能力との汎用性を明らかにした上で、教育課程のさらなる改善を行う。
- ③ 新設教科への時間数の割り当て
  - ア 小学校では、生活科、特別の教科道徳、外国語活動、外国語及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を1学年106時間、2学年110時間、3、4、5、6学年では85時間設定する。
  - イ 中学校では、1、2学年においては国語を減じて、また、全学年において、特別の教科道徳、社会及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を1学年では59時間、2、3学年では79時間設定する。
  - ウ 高等学校では、全学年においては総合的な探究の時間を減じて、「地域創造学」を1単位35時間設定する。
- ④ 新設教科の指導方法を多面的・多角的視点から工夫・改善
  - ア 児童生徒が学びの意義や価値について実感を持ちながら学習が展開できるよう、特に、体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について、その過程や成果について吟味する。
  - イ 将来遭遇する様々な問題場面において、簡単に解決策が見出せないような課題についても、主体的な姿勢で、他者と協働しながら解決を目指していく資質・能力を育成できる

よう、「問題の理解・現状把握」、「課題への気付き・課題設定」、「情報収集」、「計画する・見通しを持つ」、「実施・改善」、「まとめ・振り返り」という六つのプロセスの要素が、児童生徒の実態に応じて発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習の在り方をさらに追究していく。指導者は、児童生徒自身の変容への自覚化を促すために、探究のプロセスの各段階で目指す生徒の姿や児童生徒の主体性を重視する教師の在り方を意識して指導にあたり、その過程を省察することで得られた課題等を研究成果として整理することを目指す。

ウ 教師が児童生徒の探究内容を方向付けるのではなく、問いを通じて、児童生徒の視点を広げ、漠然とした児童生徒の課題解決のイメージを明確化できるようにしていく。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の観点からも、学習の見通しをよく共有した上で、児童生徒に委ねる視点を持ちながら、多様で豊かな考えを持った児童生徒一人ひとりの主体的な思考を促す教師の在り方について、研究成果の発信を前提とした事例の整理を行うとともに、実践研究を継続する。

エ 充実した言語活動を適切に位置付け、思考力・判断力・表現力等の育成を図る指導実践を継続する。

オ 社会的実践力の系統表に基づいた異校種との接続について意識した指導の工夫を行っていく。同校種だけでなく、異校種の生徒同士が学び合う機会を意図的に設定していく。

カ 教科等横断的な視点で資質・能力の育成を意識した指導の工夫を行う。新設教科でのこれまでの指導により明らかになった成果や課題を、各教科における指導にも生かす視点を整理し、教育課程全体における指導方法及び児童生徒の学習方法の改善につなげる。

#### ⑤ 異校種間連携について

保育園年長児を含め、校種を越えた保・小・中・高の13年間の学びであるという視点をもって、異校種の教員同士が議論を重ねる校内研究会の「相互交流」が定着している。「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」と社会的実践力との関連に着目した保小連携部会の取組をはじめ、地域創造学以外の保育・教科等も含めた交流等を通して、今後も指導方法の改善や系統性を強く意識した指導計画の修正を行っていく。また、同校種及び異校種の児童生徒が学び合う「学習者の協働」のよりよい在り方をさらに追究していく。

#### ⑥ 「地域創造学協力者会議」の実施

「地域創造学協力者会議」を実施して、新設教科及び各教科等の学びにおける「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る上で、地域創造学に参画する協力者の方々と「探究的な学びのプロセスを経ること」や、「児童生徒の自己決定等を促す学習の実現」が、確かな資質・能力の育成にとって大きな意義を持つこと等をより深く理解していくことが不可欠である。学校と地域が連携を継続し、町全体が児童生徒の「社会的実践力」を育成していくよりよい教育環境の実現に向けて、協力者による評価等も取り入れながら、会議の充実を図る。

#### ⑦ 新設教科「地域創造学」の教科書（試案）の開発・実施・改善

児童生徒が主体的に探究活動を進めていくために作成した小・中学校版の教科書（試案）の記載内容や活用計画の改善を図っていく。「探究の六つのプロセス」を大切にしたい探究の進め方、これまでの児童生徒のプロジェクト活動等の実践例の記載を児童生徒が自身の学習過程の中で適宜参照していく等、学習者の自己決定的活動を促し、自立的に「学び方を学ぶ」力の育成に資する視点を共有しながら実施・改善にあたる。

#### ⑧ 第3年次学校公開研究会の実施

研究指定期間である3年間のまとめとして、第3年次までの研究成果を基に研究発表、

授業公開、授業研究会を行い、「総合的な学習（探究）の時間」の枠組みに収まらない「地域創造学」ならではの実践を公開し、県内外の教育関係者からご意見をいただき、次年度以降の取組に生かしていく。

⑨ 社会的実践力等の見直し

研究開発指定第5年次(令和3年度)に12の資質・能力及び系統表の見直しを行ったが、今後も取組における成果や課題及び児童生徒の実態等に応じて、随時見直しを図り、より効果的な小・中・高の接続の形を追究していく。

⑩ 持続可能なプログラムの構築

今後も持続可能なプログラムにしていくために、町単独予算により配置した指導主事がコーディネーターとなり、ゲストティーチャーとの連絡調整や地域協力者会議の開催など地域とのつなぎ役になりながら、必要に応じて各学校及び教育研究所各部会等の主体的な取組を町教育委員会として適切に支援する。また、これまでの取組が生徒や地域・保護者にとって効果的なものになっているか、指導する教員にとって無理のないものになっているかなどの検証を行い、取組の内容を精選していく。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第一年次	(1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証</li> <li>② 新設教科「地域創造学」の評価規準と評価方法の実施と検証</li> <li>③ 新設教科「地域創造学」の教科書（試案）に基づく実践・改善</li> </ul> (2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 小中高12年間の実践交流と研究協議</li> <li>② 授業実践を基にした新設教科「地域創造学」と既存の教科の関係性についての分析・探究</li> <li>③ 社会的実践力の育成に向けて、主体的かつ意欲的に授業に取り組ませる指導方法の工夫・改善</li> <li>④ 授業実践を通じた教材の開発と改善</li> <li>⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施・改善</li> <li>⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を町ホームページ等を通して公開、研究成果を次年度へ還元する方策の提示</li> </ul> (3) 社会的実践力の把握と分析 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査</li> <li>② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価</li> <li>③ 教育達成調査における12の資質・能力の児童生徒の変容等についての小・中・高教員による詳細な分析</li> </ul> (4) 研究開発実施に関する体制の整備 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 運営指導委員会による評価をもとにした延長指定第1年次のまとめ</li> <li>② 教育研究所保小連携部会を中心に、保小が連携して第1ステージの保育・教育の在り方を検討</li> </ul>
第二年次	(1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証</li> <li>② 新設教科「地域創造学」の評価規準と評価方法の実施と検証</li> <li>③ 新設教科「地域創造学」の教科書（試案）に基づく実践・改善</li> </ul> (2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 小中高12年間の実践交流と研究協議</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>② 授業実践を基にした新設教科「地域創造学」と既存の教科の関係性についての分析・探究</li> <li>③ 社会的実践力の育成に向けて、主体的かつ意欲的に授業に取り組ませる指導方法の工夫・改善</li> <li>④ 授業実践を通じた教材の開発と改善</li> <li>⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施・改善</li> <li>⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を町ホームページ等を通して公開、研究成果を次年度へ還元する方策の提示</li> </ul> <p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査</li> <li>② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価</li> <li>③ 教育達成調査における12の資質・能力の児童生徒の変容等についての小・中・高教員による詳細な分析</li> </ul> <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 運営指導委員会による評価をもとにした延長指定第2年次のまとめ</li> <li>② 教育研究所保小連携部会を中心に、保小が連携して第1ステージの保育・教育の在り方を検討</li> </ul>
<p style="text-align: center;">第三年次</p>	<p>(1) 新設教科「地域創造学」の実施と改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 小中高12年間の系統的教育課程の実施と検証</li> <li>② 新設教科「地域創造学」の評価規準と評価方法の実施と検証</li> <li>③ 新設教科「地域創造学」の教科書に基づく実践・改善</li> </ul> <p>(2) 小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 小中高12年間の実践交流と研究協議</li> <li>② 授業実践を基にした新設教科「地域創造学」と既存の教科の関係性についての分析・探究</li> <li>③ 社会的実践力の育成に向けて、主体的かつ意欲的に授業に取り組ませる指導方法の工夫・改善</li> <li>④ 授業実践を通じた教材の開発と改善</li> <li>⑤ 児童生徒が校種や学校をまたいで交流できる取組の実施・改善</li> <li>⑥ 研究のまとめ（成果と課題）を学校公開研究会等を通して公開、研究成果を次年度へ還元する方策の提示</li> </ul> <p>(3) 社会的実践力の把握と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査</li> <li>② 各種調査（全国学力・学習状況調査等）との関連についての分析・評価</li> <li>③ 教育達成調査における12の資質・能力の児童生徒の変容等についての小・中・高教員による詳細な分析</li> </ul> <p>(4) 研究開発実施に関する体制の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 運営指導委員会による評価をもとにした延長指定第3年次のまとめ</li> <li>② 教育研究所保小連携部会を中心に、保小が連携して第1ステージの保育・教育の在り方を検討</li> </ul>

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	<p>(1) 運営指導委員会（年3回）の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 延長指定第1年次の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ</li> <li>② 延長指定第2年次以降の教育課程についての検討</li> </ul> <p>(2) 第5年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施</li> <li>② 教育達成調査、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施</li> <li>③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査(CAN-DOテスト)、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年意識調査等を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析、評価</li> <li>④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析</li> <li>⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施</li> </ul> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流与、成果・課題の明確化</p> <p>(4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を4月・2月に、教職員研修会を7月に開催する。</p>
第二年次	<p>(1) 運営指導委員会（年3回）の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 延長指定第2年次の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ</li> <li>② 延長指定第3年次以降の教育課程についての検討</li> </ul> <p>(2) 延長指定第1年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施</li> <li>② 教育達成調査、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施</li> <li>③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英語確認調査(CAN-DOテスト)、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年意識調査等を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析、評価</li> <li>④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析</li> <li>⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施</li> </ul> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流与、成果・課題の明確化</p> <p>(4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を4月・2月に、教職員研修会を7月に開催する。</p>
第三年次	<p>(1) 運営指導委員会（年3回）の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 延長指定第3年次の研究についての指導・助言を受けた研究成果のまとめ</li> <li>② 次年度以降の教育課程についての検討</li> <li>③ 社会的実践力を育むことを目的とした、全国向け授業公開研究会の開催</li> </ul>

	<p>(2) 延長指定第2年次の評価を基に実践的研究を行い、児童生徒の変容等を評価</p> <p>① 「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施</p> <p>② 教育達成調査、パフォーマンス評価等を用いた児童生徒への学習評価の実施</p> <p>③ 全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年生英検(IBA)、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年意識調査等を、新設教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点から分析、評価</p> <p>④ 児童生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析</p> <p>⑤ 県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施</p> <p>(3) 小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流与、成果・課題の明確化</p> <p>(4) 小・中・高等学校教員が参加する全体会を4月・2月に、教職員研修会を7月に開催する。</p>
--	---

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### ・児童への効果

社会的実践力の系統表や単元計画、学習指導要領解説に基づいた地域創造学の本格的な授業実践から3年が経過した令和3年度末、12の資質・能力や単元計画の見直しを図った。令和6年度全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査(小学校6年生)の「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」の質問に肯定回答する児童の割合は100%であり、県の肯定回答の割合よりも13.0ポイント、全国の肯定回答の割合よりも16.5ポイント高かった。また、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」の質問(本町では地域創造学の学習と置き換えて回答)に肯定回答する児童の割合は100%であり、県の肯定回答の割合よりも14.5ポイント、全国の肯定回答の割合よりも18.7ポイント高かった。児童生徒にとって身近な地域資源を題材に、主体的に課題設定や情報収集などの探究のプロセスを踏んでいくことで、地域のよさについて体感的に理解を深め、地域の魅力をどのように発信すればいいのか模索する生徒、地域課題を自分事としてとらえ、これまでに培った知識や地域の方のアドバイスを活用して解決を図ろうとする生徒などが見られ、社会的実践力に関わる様々な成長の表れであると捉えられる。

地域創造学を通して児童生徒の学習への達成感等がどのように変容したのかをとらえるために育成を目指す12の資質・能力に合わせて作成した12の質問項目で行う教育達成調査を令和元年度から住田町内の小・中・高の児童生徒を対象に実施している。昨年度と今年度の調査において住田町の小・中・高の児童生徒の平均値を見ると、「地域理解」や社会参画に関する資質・能力である「見通す力」、「困難を解決しようとする心」などが引き続き高い値を示している。

#### ・教師への効果について

授業実践を進めていく過程においては、児童生徒の実態に基づき、指導計画を随時更新しながら実践している例が見られる。このことは、児童生徒に社会的実践力を育成していくために、どのような指導内容や指導方法が適切であるのかを模索する意欲の表れであるとも捉えられ

る。また、児童生徒の学習状況を把握し、児童生徒に寄り添いながら、一緒に考えたり、視野を広げてあげたりしながら、共に走っていく伴走者として、教師が児童生徒の主体的な学びをサポートしてきた。さらに研究会の相互交流を通して、「他校種の先生方がどのような点に留意して指導しているのかを改めて確認することができた。今後も、校種間連携を継続していく必要性を感じた」という声が異校種の教員から聞かれた。地域創造学に係る教職員アンケートにおいても「学校内だけでは解決できない課題について、地域の方々や関係機関、異校種間との連携が深まっていると感じる」等の回答も見られた。授業研究会の相互交流や各部会での協議等において、社会的実践力の系統表に基づいてどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきなのかなど、校種を越えた12年間の学びという視点で指導や評価の在り方について絶えず検討・見直しが図られている。

#### ・保護者等への効果

小・中・高の保護者等に向けてアンケートを実施した。内容は、「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか？」という項目に関して四段階評価で回答するもの他に、「有意義である（ない）と思う理由」や、「地域創造学に期待したいこと」を自由記述で回答するものを設定した。「地域創造学は児童生徒の成長にとって有意義だと思うか？」という項目に関して、肯定的な回答の割合が高かった。その理由としては、「地域を知ること、更なる好奇心が掻き立てられ、地域への愛着が湧くと思うから」などの回答が得られた。「地域創造学に期待したいこと」の項目における記述内容としては、「子供たちを通して親も地域のことを知っていく、とても大切な授業だと思うので、今後も継続してほしい」などの回答が得られた。今後の地域創造学の学びをより充実したものにしていくための材料とするためにも、保護者や地域の声を多面的・多角的に分析しながら、地域全体の共通理解を図るための手立て等をさらに工夫していく必要がある。

### (2) 実施上の問題点と今後の課題

#### ・カリキュラムの不断の見直しについて

これまでに目指す資質・能力や系統的な指導方法及び評価方法、地域の実態に即した単元計画等を開発・実践してきたが、これらのカリキュラムに関しては、常に見直しを図っていく。年間指導計画の内容が社会的実践力を系統的に育成していくものになっているか、共通単元を実施する際の学校間の協働学習等の在り方等、社会的実践力の系統表や単元計画等を含むこれまでに開発してきたカリキュラム全体に関して、児童生徒や地域、保護者、教職員の実態等を踏まえつつ、他地域の先進事例等に学びながら、常によりよい方法を追究していくことが求められる。これまでの取組や児童生徒の変容等を振り返りながら分析していく評価機会を町教育研究所全体会や各研究部会において設定し、「12年間で児童生徒の社会的実践力を系統的に育成していく学び」であるという視点を大切にしたい見直しを進めていく。

#### ・評価の在り方について

地域創造学は12年間の学びであるということ意識しながら、学年や校種を超えて児童生徒に社会的実践力に関わるどのような変容があったのかについて、長期的に評価していくことが求められる。地域創造学では「探究の六つのプロセス」を大切にしており、生徒が自身のプロジェクトを実現する過程で、どのようなプロセスの中で、どのようなことに困難さを抱き、どのように乗り越え、社会的実践力に関わる変容や実践に最終的に結びついていったのか、そして教師はそれぞれのプロセスでどのような指導・支援を大切にすることが社会的実践力を育成していく上で効果的だったのかということに関して検証していく。

#### ・社会的実践力を育成するための「地域創造学」教科書の開発・実施・改善

地域創造学において、児童生徒が主体的に探究活動を行っていくために試案として作成した教科書の記載内容や活用の在り方の更なる改善を図るために検証を継続していく。「探究

の六つのプロセス」を大切にしたい探究の進め方、これまでの生徒のプロジェクト活動等の実践例の記載、地域の先輩の実践事例を児童生徒が自身の学習過程の中で適宜参照し、新たな探究課題を見出しながら自身の探究活動を進めていくこと等、学習者の自己決定的活動を促し、自立的に学び方を学ぶ力の育成に資する視点を大切にしながら、実践結果について検証していく。

#### ・持続可能なプログラムの構築について

町内の小・中・高が一体となって新設教科を据えた教育課程の在り方を探るために、町単予算により配置した指導主事がコーディネーターとなり、地域社会や児童生徒の実態に応じた資質・能力及び系統表の独自設定や小・中・高の教員が共通理解しながら作成した12年間の系統的な単元計画の策定に取り組んできた。今後も異校種の取組を滑らかに接続させ、持続可能なプログラムにしていくために、各学校及び教育研究所各部会等の主体的な取組を適切に支援していく町教育委員会の効果的な関わり方、これまでの取組が生徒や地域・保護者にとって本当に効果的なものになっているか、指導する教員にとって無理のないものになっているか等の検証を行い、取組の内容を精選していく。

## 小学校 教育課程表 (令和 6 年度)

	各教科の授業時数										特別の教科 道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	地域創造学	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語						
第1学年	306		136		0 (-102)	68	68		102		30 (-4)			34	106	850
第2学年	315		175		0 (-105)	70	70		105		30 (-5)			35	110	910
第3学年	245	70	175	90		60	60		105		30 (-5)	25 (-10)	0 (-70)	35	85	980
第4学年	245	90	175	105		60	60		105		30 (-5)	25 (-10)	0 (-70)	35	85	1015
第5学年	175	100	175	105		50	50	60	90	60 (-10)	30 (-5)		0 (-70)	35	85	1015
第6学年	175	105	175	105		50	50	55	90	60 (-10)	30 (-5)		0 (-70)	35	85	1015
計	1461	365	1011	405	0	358	358	115	597	120	180	50	0	209	556	5785

中学校 教育課程表（令和6年度）

	各教科の授業時数									特別な教科 道徳	総合的な学習の時間	特別活動	地域創造学	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語					
第1学年	138 (-2)	103 (-2)	140	105	45	45	105	70	140	30 (-5)	0 (-50)	35	59	1015
第2学年	138 (-2)	103 (-2)	105	140	35	35	105	70	140	30 (-5)	0 (-70)	35	79	1015
第3学年	105	136 (-4)	140	140	35	35	105	35	140	30 (-5)	0 (-70)	35	79	1015
計	381	342	385	385	115	115	315	175	420	90	0	105	217	3045

## 高等学校 教育課程表（令和6年度）

教科	科目	学年	1年			2年		3年		備考
			標準 単位数	共通 29単位	共通 24単位	選択 5単位	共通 17単位	選択 12単位		
国語	現代の国語	2	③						2・3年分割履修	
	言語文化	2	②							
	論理国語	4		2		3				
	国語表現	4					△4			
	古典探究	4		2		2				
地理 歴史	地理総合	2				③				
	歴史総合	2	②							
	日本史探究	3		3						
公民	公共	2		②						
	政治・経済	2					2	●6		
数学	数学Ⅰ	3	③						学校設定科目	
	数学Ⅱ	4		4						
	数学Ⅲ	3					4	●6		
	数学A	2	2							
	数学B	2			▲3					
	数学C	2					2			
	数学探究	4					4			
実用数学	2					2	●6			
理科	科学と人間生活	2	②							
	化学基礎	2		②						
	化学	4					△4			
	生物基礎	2		②						
	生物	4					△4			
保健 体育	体育	7～8	③	②		③			1・2・3年分割履修	
	保健	2	①	①					1・2年分割履修	
芸術	音楽Ⅰ	2	②						2・3年継続選択	
	音楽Ⅱ	2			◇2				2・3年継続選択	
	音楽Ⅲ	2					◇2		2・3年継続選択	
	書道Ⅰ	2			◇2				2・3年継続選択	
	書道Ⅱ	2					◇2		2・3年継続選択	
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	③						2・3年継続選択	
	英語コミュニケーションⅡ	4		4						
	英語コミュニケーションⅢ	4				4				
	論理・表現Ⅰ	2	2							
	論理・表現Ⅱ	2			◇2					
	論理・表現Ⅲ	2					◇2			
家庭 情報	家庭基礎	2	②							
情報Ⅰ	2	②								
地域創成学	地域創成学	1～3	①	①			①		研究開発学校による学校設定教科	
共通教科・科目の単位数の計			30	27・30			22・30			
商業	ビジネス基礎	2～4			▲3		2	△4		
	ビジネス・コミュニケーション	2～4					2			
家庭	フードデザイン	2～8					4			
専門教科・科目の単位数の計			0	0・3			0・8			
総合的な探究の時間		3～6							研究開発学校による学校設定教科「地域創成学」で代替	
ホームルーム活動			1	1			1			
合計			31	31			31			
備考			※ 2年において▲3数学B及び◇2論理・表現Ⅱを選択した生徒は、3年で●6（政治・経済と数学探究、または数学Ⅲと数学C）を履修する。 ※ 2年において▲3ビジネス基礎及び◇2（音楽Ⅱまたは書道Ⅰ）を選択した生徒は、3年で●6（実用数学とフードデザイン）及び△4（情報処理とビジネス・コミュニケーション）を履修する。							

## 学校等の概要

- 1 学校名 住田町立世田米小学校（スミタチヨウリツセタマイショウガッコウ）  
校長名 鹿糠 博子（カヌカ ヒロコ）
- 2 所在地 岩手県気仙郡住田町世田米字川向 55-1  
電話番号 0192-46-3135  
F A X 番号 0192-46-3136
- 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
11	1	17	1	13	1	10	1	21	1	4	1	76	6
1	情	1	知	2	知	3	情					7	知1情1

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				8			1	1	2
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		15						

## 5 研究歴

文部科学省関係 平成 29 年～令和 6 年度 研究開発学校

- 1 学校名 住田町立有住小学校（スミタチヨウリツアリスショウガッコウ）  
校長名 新沼 健（ニイヌマ タケシ）
- 2 所在地 岩手県気仙郡住田町上有住字山脈地 5-2  
電話番号 0192-48-2014  
F A X 番号 0192-48-2088
- 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
9	1	4	1	8		3	1	8		16	1	48	4
		1	情			1	知					2	知1情1

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				6		1			1
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		11						

## 5 研究歴

文部科学省関係 平成 29 年～令和 6 年度 研究開発学校

- 1 学校名 住田町立住田中学校（スミタチョウリツスミタチュウガッコウ）  
校長名 遠山 秀樹（トオヤマ ヒデキ）
- 2 所在地 岩手県気仙郡住田町世田米字大崎 72-1  
電話番号 0192-46-3155  
FAX番号 0192-46-3156

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
20	1	27	1	32	1	79	3
1	知					1	知1

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				7		1			4
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		15						

5 研究歴

文部科学省関係 平成29年～令和6年度 研究開発学校

- 1 学校名 岩手県立住田高等学校（イワテケンリツスミタコウトウガッコウ）  
校長名 伊藤 治子（イトウ ハルコ）
- 2 所在地 岩手県気仙郡住田町世田米字川口 12-1  
電話番号 0192-46-3141  
FAX番号 0192-46-3144

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	28	1	16	1	17	1	61	3
	計	28	1	16	1	17	1	61	3
計		28	1	16	1	17	1	61	3

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1				10		1			2
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
		2	1	18						

5 研究歴

文部科学省関係 平成29年～令和6年度 研究開発学校